

交通事故の多くは安全確認不足 自転車の行動特性を十分理解して走行しましょう

安全運転を実践する上で、自転車への配慮は重要な要素のひとつです。手軽な乗り物として子供から高齢者まで幅広く利用されている自転車ですが、それだけにドライバーは細心の注意が欠かせません。梅雨時に入り、傘をさしながらの走行*も考えられます。今回は、自転車の行動特性と事故防止のポイントを紹介します。

※2015年6月1日から、道路交通法や都道府県条例により禁止されている行為です。



自転車「車両」という認識に欠けている
行動特性 **利用者が多い**

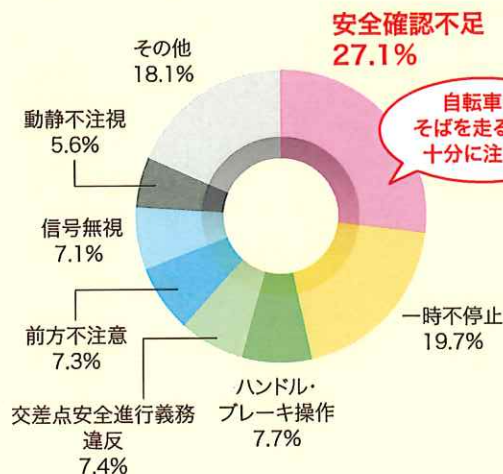
**危険予測
運転を**

自転車の交通事故件数の第1位は「安全確認不足」

多くの利用者がいる自転車ですが、乗っている全員が運転免許を持っているわけではありません。そのため、自転車を「車両」として認識しておらず、急な飛び出しや進路変更といった危険な行動をとりがちです。

自転車の法令違反別交通事故件数の割合を見ると、「安全確認不足」が最も多く全体の1/4を占め、次に「一時不停止」となっています。一時停止の表示や標識のある場所でも飛び出してくる自転車は多く、「一時停止の標識があるから止まるはず」と思い込むのは危険です。

自転車の法令違反別交通事故件数の割合 (2017年)



「急に飛び出してくる」と常に認識

自転車は車道の左端を走行するため、前方に駐車車両などがあると後方を十分に確認せず右側に進路変更してくるケースがよくあります。また、歩道を走行している自転車にも油断は禁物。対面してくる歩行者などにより進路をふさがれると、いきなり車道に飛び出してくることも。車道と歩道の間にガードレールがあっても、その切れ目から車道に出てくることもあるので注意してください。



ミラーの死角に入ってしまうことも

交差点を左折する際は、左から進行してくる自転車に要注意。例えば交差点にさしかかった時、目視で自転車を確認していても左折直前にミラーの死角に入り、一時的に見失うこともあります。そのため、“自転車はいない”と誤って判断してしまう危険があります。

自転車はふらつきやすい乗り物

自転車は、段差など路面のちょっとした変化や強風などでバランスを崩し、ふらつきやすいので注意しましょう。

また、法律で禁止されているにもかかわらず、最近はスマートフォンを見ながらの走行もよく見受けられます。スマートフォンに集中するあまり周囲の状況が目に入らず、走行が不安定になるばかりか車両の接近に気づかなかつたり、赤信号で横断してきたりすることもあるのです。

逆走自転車に注意

自転車は車道の左端を走行するのが原則。しかし現実には、右側部分を逆走してくるケースもしばしばあります。そのため車幅の広いトラックは自転車と接触したり、自転車を避けようと右に進路変更してセンターラインをはみ出し、対向車と衝突したりする危険もあるので注意が必要です。



自転車がふらつきやすい主な例

- ・前後に多くの荷物を積んでいる
- ・片手で運転している(スマートフォン、傘など)
- ・子供や高齢者が運転している
- ・走行しながら犬を散歩させている…など
- ・自転車に子供を乗せている

● 自転車の行動特性を考えた安全運転のポイント

- ① 一時停止の標識があっても注意
- ② 急な進路変更を念頭に置いて
- ③ 交差点の左折時に注意
- ④ バランスを崩しやすいと認識
- ⑤ 逆走してくる時は落ち着いて

**誰でも気軽に乗れる自転車だけに、
多くの危険も潜んでいることを忘れずに**



子供・高齢者の交通事故が多発！ 行動特性を先読みした安全運転を

歩行者に注意を払うことは、安全運転への最重要課題のひとつ。特に、子供や高齢者は思わぬ行動を取りがちです。5月に入り、新入学した小学生などは学校にも慣れて行動的になってきます。そこで、ドライバーが改めて確認すべき事項をまとめた『安全運転 キホンのキ』。今回は子供・高齢者の行動特性と事故防止のポイントを紹介します。



子供の
行動特性 **急に動き回り、走り回る**

予測不能

子供の世界は自分中心

子供(12歳以下)の事故の特徴は、“飛び出し”が多いため。それは、物事を自分中心で考え、周囲の状況に注意を払わず行動するという子供の特性があるからです。例えば、道路の反対側に興味を持つものがあれば、脇目もふらずに一直線に走りだします。また、友達とふざけあっていて急に道路に出てきたり、1人が飛び出すとほかの子供たちも次々に同じ行動をしたりもします。このようにドライバーが予測していても、それを超える行動がよく起こります。

子供は発見が遅れがち

子供は大人に比べ背が低いため、物陰に遮られ発見が遅れることも。例えば駐車している乗用車の脇を親子が歩いている場合、ドライバーから大人は見えても、子供の姿に気づかないという危険が潜んでいます。

親と一緒にいても、油断は禁物

親子で歩いているのを見かけた時、“親と一緒にだから大丈夫だろう”と思ってしまうのは危険なこと。手をつないでいてもそれを振り払い、急に駆け出す場合もよくあるので油断は禁物です。



子供の行動特性を考えた安全運転のポイント

①あらかじめスピードを落とす

学校や公園付近、通学路など子供が多い場所を走行する時は特に注意しましょう。

②子供の近くでは常に慎重な運転を

たとえ親と一緒に歩いている場合、安心せず慎重に運転をしましょう。

③車両の陰に隠れていないか注意

駐停車している車両付近では、子供が隠れていないかどうかを念頭に置いて走りましょう。



高齢者の 認知不足、判断困難、行動の遅れ 行動特性

▶ 予測不能

身体能力の低下が事故に直結

高齢者の事故の大半は横断中に発生しており、車両が接近しているにも関わらず横断してくるケースもよくあること。また判断力が低下しているために、車のスピードを的確に判断することが難しい人も。そのため「横断できる」と自分で判断してしまい事故につながっています。

早朝・深夜に出歩くことも

高齢者が出歩くのは、昼間だけとは限りません。目覚めるのが早ければ明け方、また深夜の場合もあります。そして、目立ちにくい地味な服装をしていることも。“こんな時間帯だから人がいるはずはないから大丈夫”と思ってしまうのは危険です。

車両の直前・直後の横断に注意

高齢者は、車両が通過した直前・直後の道路を横断する傾向があります。例えば片側一車線道路において、手前の道路を車両が通過した直後に渡りはじめ、反対側から来る車両に気づかず事故に至ってしまうことも起きています。



なぜ高齢者は車に気づかず横断するのか

- ・視力や聴力の低下によって、車の姿や音に気づきにくい
- ・周囲の状況に関係なく、自分の思い通りの行動を取りがちになる など
- ・振り返るなどの動作が鈍く、道路状況をよく確認できない

高齢者の行動特性を考えた安全運転のポイント

①行動に注意した運転を

道路脇に高齢者を見かけたら、横断してくるかもしれないと考えてスピードを落とし、行動に注意しましょう。

②視野を広くして確認を

自車線側だけでなく対向車線側の道路脇にも目を向けて、横断しそうな高齢者がいないかどうかを確認しましょう。

③早朝・深夜の運転は十分注意

早朝や深夜に出歩く場合もあるので、昼間と同様に慎重に運転しましょう。

子供や高齢者の予測のつかない行動に注意して、安全運転を。